

2011年
12月20日
火曜日

金銭化と幸福

山鹿久木 教授 (都市経済学)

幸福の指標づくりが盛んである。国、自治体ともにこの幸福の「指標」作りに熱心であるが、はたして幸福度が高いことを実感できる生活とはどのようなものなのか。この幸福の指標づくりの中心となっている学問の一つに経済学はある。なぜなら経済学は幸福を追求している学問であるからである。しかし、そんなことを信じているのは経済学者か経済学部の人だけかもしれない。経済学者に国をまかせるとろくな世の中にならない、そう信じてやまない人は実に多い。

経済学は価格の理論ともいえる。価格とは財の価値を金銭評価したものである。人々はその価格の変化に基づいて行動する。価格が存在する財とは、市場で取引されている財であるが、市場をもたない財であっても金銭評価が必要になることがある。

市場での取引がされていない財までも評価する必要がある代表的な例が、「費用便益分析」である。「費用便益分析」とは公共事業に対して、その事業を行うか否かの判断を行う際の評価である。現在、すべての公共事業についてはこの評価を行い、事業がもたらす便益を費用が超えないと、その事業を行ってはいけないことになっている。具体的には、事業がもたらす「便益」と「費用」をそれぞれ算出し、(便益) - (費用) > 0、あるいは (便益) + (費用) > 0 の場合にしかその事業を実行してはいけないことになっている。そしてこの条件を満たした事業は、効率的な事業であることが理論的に支持されている。したがって、事業の効率性が当初よりも著しく悪化した場合には、たとえ事業が進行中であっても中止になることがある。

さて、話をもとにもどすと、便益と費用の算出の際に、あらゆるものを金銭換算するのである。そうしないと、先述した便益と費用の引き算なり割り算を行うことができない。たとえば、混雑する国道に、高規格バイパス道路を通して、混雑緩和をねらう事業を考えよう。このバイパス道路を通すことにより旧国道では混雑が緩和され、交差点における交通事故数が減少する。それにより、事故にあうことなく救われた命の価値を金銭換算して便益に加える必要がある。一方、新たなバイパス道路は山の中に通されることになっており、その際、そこにあつたけもの道が分断される。その結果、野生動物が自動車事故にあうようになる。その失われた野生動物の命の価値を金銭換算して費用に参入する必要がある。

これら2つの命の価値が金銭換算されし引きされる。このような命を金銭化するような考え方は社会の多くの人には受け入れられない。このような考え方に道徳や倫理が存在しているとも考えにくい。そういう点からも、経済学は多くの人から支持されない。

世の中を経済学者が幸せにできるとは思わないが、そうするための手伝いはできるかもしれない。考え方の選択肢の一つとしてあつてもよい学問であるし、理路整然とした考え方である。学んでおいて損はない。経済学の考え方のエッセンスは、(時々)役に立つ。